



巻頭言

我田引水

藤井克彦*

年頭から数箇所の新年々賀会に出席する機会があった。どの会合に出ても年頭の挨拶は異句同語に「今年は円高で厳しい年になりそうだ。」「景気は低迷傾向だ。」「内需は伸びないだろう。」「貿易摩擦の問題は深刻化するだろう。」等々の言葉が聞かれた。

一方、本年4月に入社する若者の就職戦線は昨年春以来活況を呈している。特に技術系学生の求人は順調で、求人のための訪門客が大学に殺到し、応接にいとまのない有様であった。昨年末から今年にかけては、すでに来年度の求人のための動きが始まっている。若人にかかる社会の期待が如何に大きいかを物語っている。

新聞紙上では、毎日のように先端技術振興、新素材開発といった語句が掲載されている。すっかりわれわれの日常生活の中に入りこんだ計算機が発明されたのはそんなに昔のことではない。しかし、その進歩・普及には目を見張るものがある。計算機自体の能力は急速に伸び、小型化され、価格は実に10年間で1,000分の1になった。今や計算機なしでは日常生活は成り立たないといってよい。

この計算機の例のように、科学技術の進歩がこんなに世の中を揺り動かしている時代と

いうのは、今までの人類の歴史では稀有の出来事であろう。後世の歴史家は、現在の社会変革を、科学技術による革命の時代と評価するのではないだろうか。このような時代に科学技術に関連した仕事に従事している者は、恵まれていると思わなければならない。特に若い人達にとっては最高の時代といえるだろう。

現在、大学を卒業する学生の内訳を見ると理工系の学生数が以前に比べて圧倒的に多くなっている。技術者は世の中に出ると、自分で品物を工夫し、仕事を作って行くことのできる職業である。したがって技術者は多すぎても世間に弊害を及ぼすことはない。戦後大学の工学部は非常に膨張し、沢山の卒業生が世の中に出たが、彼等は日本経済の発展のために大きな貢献をした。そして、今後さらに多くの技術者を必要としている分野が沢山ある。

このように考えると、景気の活性化の鍵の一つは技術開発にあるように思える。新しい技術が新製品を生み、需要を喚起することに期待が持たれる。今後の世の中の牽引車としての役割が技術開発に従事している人達の肩にかかっていることを自覚し、景気を支配する鍵を手中にしていることを自負して努力すべきである。

*藤井克彦 (Katsuhiko FUJII), 大阪大学, 工学部, 電気工学科, 教授, 工学部長, 工学博士, 電気工学